

豊かな自然と文化を持つ
日本の景観のあり方を探る
「特集」日本の景

【第三回】

新

風景や景観を語るとき、
新しい活動に対して懐疑的である場合がある。
しかし、今を生きる人々の
斬新なアイデアや取り組みも街に活力を与え、
未来の日本をかたちづくる上で重要な要素である。
第三回「新」では、そのような例を取材し、
それぞれの取り組みにいたった経緯から紹介する。

新しい形

東京ゲートブリッジ

[P.06]

新しい光

神戸摩耶山掬星台

[P.10]

新しい街

秋葉原

[P.12]

東京港中央防波堤外側埋立地と江東区・若洲を
結ぶトラス橋「東京ゲートブリッジ」。橋梁の
橋桁が2011年2月につながった。トラス構造
部の特殊な形状から話題になっている。

東京ゲートブリッジは鋼3径間連続トラス・ボックス複合橋。トラスの部材は約1.3m角、重量を軽減するために高強度で溶接作業性に優れたBHS鋼材を採用している。トラス構造部の重量約2万トンの大部分を主橋脚（内側）が負担する。

新しい形

東京ゲートブリッジ

形状の制限と構造的合理から 生まれた恐竜橋



【特集】

日本の景



物流の円滑化を図るために、東京港南部に計画されている東京港臨海道路Ⅱ期事業。東京ゲートブリッジは、臨海道路の橋梁区間にあたる。

東京港のコンテナ物流を 円滑化するルート

今年二月、建設中の「東京ゲートブリッジ」の橋桁が上がり、東京港に新たな景観が生み出された。人目を引くのは鉄骨のトラス構造部の特殊な形である。まるで二頭の恐竜が向かい合っているように見えることから「恐竜橋」と呼ばれることもある。

東京ゲートブリッジの計画は、東京湾に浮かぶ中央防波堤外側埋立

地から江東区・若洲を結ぶ東京港臨海道路Ⅱ期事業として二〇二〇年度にスタートした。二〇一一年度中の開通をめざして、現在工事は最終段階にさしかかっている。開通すれば中央防波堤外側埋立地を挟んで、大田区・城南島から若洲まで約八キロがなくなり、現在混雑している臨海部の物流交通が効率化される。

近年、国や都は東京港の国際競争力を引き上げるために、さまざまな事業を進めている。東京港は日本を代表する商業港であり、国際海上コンテナの取扱量は年間三八二万個（二〇一〇年）。国内第一位であるものの、釜山やシンガポールなど海外の主要港には大きく水をあけられている。その原因の一つがコンテナ船の大型化である。これに対応し、取扱量を増やしていくには、大型船の寄港が可能となるように港湾機能を強化する必要がある。そこで港内の主要航路部の水深を下げることや、コンテナターミナルの新設が計画されている。同時に増加するコンテナを円

滑に運ぶために、臨海部の道路整備は欠かせない。東京ゲートブリッジを含む東京港臨海道路Ⅱ期事業はその一部として開通が待たれているのである。

航路と空路の制約条件から 生まれた形状

今回のⅡ期事業の道路全長は約四、六〇〇メートル。そのうち東京ゲートブリッジの長さは二、六一八メートルに達し、トラス構造部分の長さは七六〇メートルである。また、水面からの最高高さは約八七・八メートル。一般的な条件下なら、高い塔を設け、吊り橋や斜張橋とするとところだが、東京港の東側の航路を跨ぎ、上空



航路を跨ぐ主橋脚間は440m。橋桁の上下に発生する高さ制限からトラス構造が採用された。（資料提供：国土交通省 東京港湾事務所）



務所の保坂行輝さんは東京ゲートブリッジの広報活動の担当者。橋桁中央部までトラスが設置されていないことにも注目してほしいと語る。「景観と同時にブリッジからの眺望も考慮されています。もっとも開放的な部分ですから、歩行者の楽しみも大きくなるでしょう」。

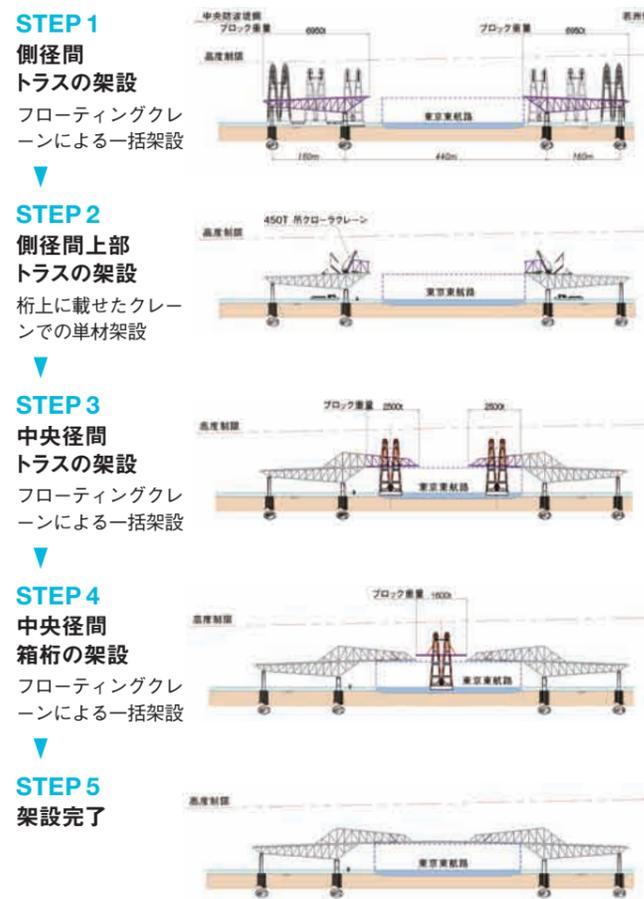
は羽田空港発着の航空機が飛ぶ空域であるため、高さが二重に制限された。橋桁上部の高さは抑えなければならず、桁下は船舶が安全に通行できる高さを確保しなければならぬ。そのために橋桁の下下にトラス構造をもつ珍しいデザインとなった。橋梁の色はパールブルーのツートンカラー。橋梁部分を際立たせるために、トラス部を薄く、桁部を濃く表現している。



STEP 1

**海上から間近に眺める
見学クルーズが人気**
湾岸から東京ゲートブリッジを遠望することはできるが、海上からもっと間近に見る方法もある。橋桁の下は東京港の観光クルーズの航路でもあるからだ。
観光事業会社「シーライン東

トラス架設ステップ



STEP 2



STEP 3



STEP 4

壮観な工事過程を見学する人々。



上/オープンデッキからの眺め。東京のさまざまな名所を背景に、東京ゲートブリッジの景観を楽しめる。下/シーライン東京の観光船、シンフォニー・モデルナ(2,618トン)。日の出桟橋から通常40分ほどでゲートブリッジに達する。



京」が毎日運航しているレストラン船「シンフォニー」は、日の出桟橋を出てレインボーブリッジ、ガントリークレーンが立ち並ぶ大井ふ頭を過ぎた後、中央防波堤内側埋立地を回り込んで東京ゲートブリッジの下を通過する。階上のオープンデッキから、トラス構造の規模の大きさを実感する瞬間である。また、同社は昨年六月、まだトラスや橋桁を建設中だったころに、通常運航に加えて特別クルーズを企画。通常よりもゆっくりと時間をかけて様々な角度から見学できるコースを三カ月に一度程度催行した。専門家による解説を船内放送するなど内容も充実している。「最初は本当にお客様が来てくださるか不安もあったのですが、多い時には一二〇名ほどになりました」と同社営業部の人見寧則さん。乗船客は予想外にもほぼ半数を女性が占め、建設の進捗を確かめるリピーターもいたという。今年度末に開通すれば夜間のライトアップも行われる予定。東京ゲートブリッジの魅力は本格的に広まっていくことだろう。

晴れている日には、東京ゲートブリッジの間から東京スカイツリー®が見える。



シーライン東京営業部企画広報グループの人見寧則さん。「海上からさまざまな角度で東京ゲートブリッジを見ることができなのがクルーズの魅力」と語る。

【特集】

日本の景

掬星台の展望台から東の方向を望む夜景。中央の島は神戸港の六甲アイランド。灘区、東灘区、芦屋市や西宮市の市街地の明かりがきらめき、その向こうに大阪湾が広がる。西の方向は神戸ポートアイランドをはじめ、中央区、兵庫区、長田区の街まで見渡すことができる。



日没後の「摩耶★キラキラ小径」。敷き詰められた蓄光石がやわらかに発光し、幻想的な雰囲気を出す。蓄光石は太陽光などの紫外線を吸収する無機化合物を建材ガラスに混入、加工したもの。暗くなると発光して見える。ブラックライトの照射でより輝きを増す。

掬星台は夜空も美しい場所。星のイメージを小径に託し、天の川のような流れのなかに星座があしらわれている。



新しい光

神戸摩耶山掬星台

光る小径が 一千万ドルの夜景へ誘う

阪神間の夜景を 一望するスポット

神戸・摩耶山は六甲山系の西側に位置し、標高約七百メートル。山頂の東側の展望公園「掬星台」からは東西に広がる神戸の街を眼下に一望することができる。摩耶山は六甲山に連なりながら南へ張り出しており、その眺めは神戸港や三宮元町などの市街地に迫る。さらに遠く大阪湾岸の果てまで、明石海峡大橋も視界に入る大パノラマが展開し、誰もが一瞬言葉を失うようなすばらしい見晴らしである。とくに夜景は「日本三大夜景」の一つ、また「一千万ドルの夜景」と謳われ、市民や観光客を引きつけてきた。

神戸は幕末の開港とともに西洋文化を取り込みながら発展してきたが、街の背後に稜線を描く六甲山系の山々もその文化の一端を担った。元来はそこで薪を伐り出すなど、生活に利用する里山であったが、欧米人は自然のなかで余暇を楽しむレクリエーション文化を持ち込んだ。日本初のゴルフ場や、



掬星台は展望公園として整備されている。園内に「摩耶ロープウェイ星の駅」と展望台2カ所が設けられており、駅から展望台まで「摩耶★キラキラ小径」が延びている。

別荘地、登山コースなどがつくられ、日本人にもレクリエーションは浸透していった。山の様相も変化した。じつは明治の中頃まで六甲山系は薪の伐採などにより禿山になっていったという。一九〇二（明治三十五）年に土砂崩れなどを防ぐために植林事業を開始。百年を経過し、現在はクスギ、コナラ、カシなど、広葉樹の豊かな森林を形成している。

さらなる復興のために輝く 光の小径

摩耶山には空海上人ゆかりの寺院があり、古くから信仰の山とし

ての性格を持つ。眺望の良さを核として昭和三十年、神戸市によって中腹のケーブル駅から山頂付近までロープウェイが開通。ホテルや遊園地などが設けられ、市民が気軽に楽しむレジャーランドとなった。しかし、レジャーの多様化により、昭和四十年代頃に遊園地が閉園し、その後、展望広場が現在の展望公園「掬星台」として整備された。

美しい夜景が消えたのは、阪神・淡路大震災に襲われた平成七年一月十七日のことである。建物が倒壊し、多くの生命が犠牲になった。困難な状況のなかで、「徐々に灯っていく明かりは、街がよみがえる原動力になりました」と語るのは掬星台や森林を管理する神戸市建設局公園砂防部森林整備事務

所長の重藤洋一さん。二〇〇五（平成十七）年には、掬星台の敷地内に新たに「摩耶★キラキラ小径」がつけられた。震災後、神戸の観光客は減少し、徐々に回復していったものの震災前には及ばない。摩耶山にもより多くの人に訪れてもらおうと、新たな魅力づくりを目指したという。「摩耶ロープウェイ星の駅」から展望台に向かう小径に、星のイメージを託して蓄光石が敷き詰められた。日が落ちるとやわらかに発光し、天の川のように浮かび上がる。「もともと神戸市は夜間の光を大切にしている街づくりをしてきた」と重藤さん。自然に囲まれた色とりどりに瞬く夜景は、日常の営みの大切さも教えてくれるようだ。



神戸市建設局公園砂防部森林整備事務所主幹（副所長）の重藤洋一さん。「夜景のすばらしさは申し分ありません。摩耶★キラキラ小径も皆さんに来ていただくきっかけになれば」と語る。

【特集】

日本の景

2008年の殺傷事件により中止となっていたホコ天。街の関係者の努力で安全対策に努め、2011年に再開された。ビラ配りなどに規制も設けられている。



ホコ天再開に先立ち、防犯目的で50台のカメラを設置。街を見守る。

秋葉原ならではの風景はこのときから始まる

電気街としての秋葉原は七十年の歴史をもつ。戦前すでに電気製品やラジオを扱う電気商が集まっていたという。敗戦後、電気商の復興とともに、ラジオパーツや組立てラジオを製作販売する露天商が出現。その後、秋葉原駅のガード下に代替地を得て、ラジオストアなど小規模の店舗が多数入居する建物が増えていった。

昭和二十年代の終わりから三十年代、高度経済成長期を迎えて家電製品が飛ぶように売れ、秋葉原は近郊から多くの消費者が集まる家電の街となる。当時の一般的な電気店は、家電メーカーと専売契約を結んでおり、地域密着型で一家の製品を販売していたが、秋葉原には卸売りと小売りを兼業する店も多く、価格競争により、さまざまなメーカーの製品を見比べながら安値で買える魅力をいち早くつくりだしたからだ。

昭和四十年代以降、電気製品は多様化。電気店の形態も多店舗展開や大型化が進む。大量仕入れ大量販売により売りやすく買いやすい大型店のビルが林立し、秋葉原は日本一の電気街へと成長した。また、日本の技術力が世界に評価され、メイドインジャパンの製品を求めて外国人客が増加。AKIHABARAが国際的に認知される。平成六年にはパソコン関係の売上が家電関係を上回り（帝国データバンク調べ）、パソコン街へと大きく変貌をとげた。

一方、流通の変革によって各地で量販店などが台頭したことやバブル経済崩壊などにより、秋葉原の企業も撤退、廃業、他社資本との提携などが進み、淘汰されていった。加えてネット通販が隆盛となり、業態も変化を続けている。並行して二〇〇〇年（平成十二）前後からオタク文化といわれるコミック、アニメを中心にポップカルチャーが起業、メイド喫茶が人気の的。歩行者天国ではさまざまなイベントが行われ賑わった。また、駅前再開発と同時に二〇〇五～〇六年、産官学連携機能をもつオフィスビルとして、ダイビルや秋葉原UDXが建設され、さらに新しい街へと更新されている。

秋葉原電気街振興会の事務局長、日村丈夫さんは語る。「街のなかにさまざまな文化が入り込んで、秋葉原は変化しています。そこに電気店が昔ながらに構えてうまく融合している。それが世界中からお客様が来て下さるポイントです」。異文化を受け入れる土壌は、電気製品流通の先駆者として時代を乗り越えてきた歴史にあるという。



秋葉原電気街振興会事務局長、日村丈夫さん（右）、同会主事、荻野高重さん（左）とともに一九七〇年代から電気機器業界を歩んできた電気街の生き字引き。変わっていく秋葉原をつぶさに見えた。

日本の景



電気店のビル街にアニメなどポップカルチャーの店が混じり、駅前再開発で生まれたダイビルがそびえる。JR線、東京メトロ、つくばエクスプレスと交通も至便。多くの人が訪れる。

秋葉原
新しい街
異文化を取り込み、集積と成長を続ける

ラジオから電気・パソコンの街、オタク文化の街へ。変化を受け入れてきた秋葉原

東京・千代田区、JR秋葉原駅西側の電気街口周辺と中央通りを中心とした一帯が秋葉原。通称アキバと呼ばれ、電気とポップカルチャーの街として広く海外まで知られている。不況下とはいえ幅広い年代、国籍、職業、趣味をもつ人々が訪れ、一種混沌とした雰囲気の中に熱っぽさを漂わせる魅力的な街だ。

秋葉原は常に新しい文化や時代の変化を柔軟に受け入れ、生まれ変わることで発展をしてきた。秋葉原の成長の軌跡

2000	1990	1980	1970	1960	1950	1940	1930
 <p>駅前再開発事業を受け入れ、さらに訪問者数が増加。発展を続けている。</p>	 <p>マルチメディア社会への移行。最前線の情報家電の街へと変貌をとげる。</p>	 <p>家電の全盛。大型店の高層ビルが立ち並び、ほぼ現在の街並みが完成。</p>	 <p>高度経済成長。「三種の神器」白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫が急速に普及。</p>	 <p>第二次大戦後、組立てラジオの販売人気により露天商が繁栄した。</p>	 <p>ラジオが情報・娯楽を提供した時代。ラジオ部材を中心に販売店が集まる。</p>	 <p>店名や商品を宣伝する看板に加え、アニメのテントシートが街に溢れる。</p>	

9月号
【てん】

転



機能の転換
横浜港みなとみらい21



街並みの転換
原宿表参道



社会の転換
都電荒川線

（写真提供：姫路城大天守保存修理JV）



象徴の継承
姫路城



思想の継承
平泉



記憶の継承
山本作兵衛の炭鉱記録画

継

10月号
【つぐ】

11月号
【しん】

新



新しい形
東京ゲートブリッジ



新しい光
神戸摩耶山掬星台



新しい街
秋葉原

豊かな自然と文化を持つ「日本の景観」のあり方を探る

それぞれの場所で
育まれた独自の
日本の景をいつくしむ

風景はその場所独自の文化や生活を示し、後世にも影響を与える重要な役割を担っている。私たちの原風景として根付く「日本の景」を守り育てていくことは、建設業が果たす役割とともに、そこに携わる多くの人々の力によって成り立っている。そこで建造物のみならず、さまざまな風景をつくっている九つの取り組みを紹介してきた。

第一回「転」では時代の節目や社会情勢の変化をきっかけに変貌をとげ、独自性を獲得するにいたった経緯があった。第二回「継」では歴史の価値を理解する人々の類まれなる努力を見出した。第三回「新」では街の魅力を高める斬新なアイデアや取り組みを見た。

多くの風景が社会的な変化や、時代ごとの特徴を如実に表すものであった。その裏には人々の風景への想いや努力が生きていた。風景は自然に残るものではなく、意識して残していくものなのかもしれない。読者の皆様「日本の景」について再考する際の参考としていただければ幸いである。

次回の特集は、日本が世界に誇る技術や事業を紹介する「日本の底力」。

日本人ならではの応用力、総合力、技術力を活かして、品質を追求する企業の飽くなき挑戦を取り上げます。



秋葉原観光情報センター

日本語、英語、中国語に対応。秋葉原ツアー、店舗情報、ポップカルチャー情報の紹介などを行う。通訳案内士ツアーも紹介している。中央通りのソフマップ秋葉原本館2階に設置。

免税店

電気炊飯器やシェーバーなどの人気家電とともに、カメラ、フィギュア、日本土産のTシャツや記念小物など、アイテムの幅が広がっている。



秋葉原新発見ツアー

ATPAが主催。英語に対応するガイドと電気パーツ街やメイドカフェ、ポップカルチャー店などを巡り、秋葉原を知ってもらう。帰国後の口コミにも役立つ。

（写真提供：NPO秋葉原観光推進協会）

秋葉原 外国人誘致の取り組み



秋葉原おもてなしプロジェクト 公式キャラクター

世界の7カ国を代表する公式キャラクター8体を製作。ポスターやマップ、フリーペーパー、海外イベントにも使用している。秋葉原のプロモーション及び振興目的なら申請によって無償使用可能(©ATPA)

【特集】

日本の景

クールジャパンを発信、 観光地化を目指す

アニメ、コミック、フィギュア、コスプレなど、日本のポップカルチャーは世界的に注目され、クールジャパンと呼ばれる。その拠点が秋葉原だ。新たな発想で事業展開がなされ、業種業態は多岐にわたる。この分野と電気街との交流・連携を図り、秋葉原を持続的に発展させる目的で平成十七年に発足した組織がNPO法人秋葉原観光推進協会(ATPA)。それまで商業組合がなかったポップカルチャー店を中心に組織されている。「ポップカルチャー店の経営者は若く、アイデアが豊富にあります。子供の頃からアキバに通い親しみ、この街の発展に協力したいと考える人も多い。その想いは電気街の商業者と同じです」と語るのは同協会の副事務局長、石原直幸さん。同協会発足のきっかけは、外国人客を呼び込むために秋葉原の観光地化を図ろうというプロジェクトだった。電気街とポップカルチャー店を初めて合同し

て、街を案内する「秋葉原新発見ツアー」が行われた。同協会は中小企業庁の推進する「ジャパンブランド育成支援事業」の認定事業者となったり、観光庁の「外客受入戦略拠点」に選定された秋葉原の認定事業者として、政府の「知財立国」や「観光立国」政策と合致した活動を展開中。「おもてなし」をコンセプトに、外国人客を誘致する「秋葉原おもてなしプロジェクト」は大きな柱だ。観光をキーワード窓口として秋葉原エリアの企業や大学、メディアなどの組織と横断的に連携し、新旧が集積する秋葉原のポテンシャルを活かした街づくりをめざしている。



NPO法人秋葉原観光推進協会副事務局長、石原直幸さん。手に持っているのは「おもてなしロゴ」。外国人観光客が安心して楽しめる目安として店舗や施設に掲示。ロゴはホログラムも使用し、手作りした秋葉原らしいもの。